

武蔵野

映画文学人生論

原作：国木田独歩（1898年）「国民の友」
参考：大岡昇平『武蔵野夫人』（1950年）「群像」
演出：溝口健二（1951年） 脚本：依田信賢
出演：秋山道子 田中絹代 脚色：福田恒存
秋山忠雄 森雅之 撮影：玉井正夫
宮地勉 片山明彦 音楽：早坂文雄

武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない

おそまきながら、国木田独歩『武蔵野』をこの歳になつてはじめて読んだ。田山花袋『蒲団』、島崎藤村『破戒』とともに自然主義の代表的作品と思ひこんでいたが、実は独歩には浪漫派の時期があり、『武蔵野』はその頃の作品らしい。

自然主義といえば、モーパッサンやゾラの影響を受けて、社会や人間の心の暗部をありのままに描く作風という印象だが、『武蔵野』はそうではない。自然の美、あるいは風雅の誠を描いた芭蕉や蕪村の俳文、ツルゲーネフの小説やワーズワースの詩に通じる趣きが漂っている。

「武蔵野の俳（おもかげ）は今わずかに入間郡に残れり」と自分は文政年間にできた地図で見たことがある——という書き出しで、昔の武蔵野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といつても宜い、と記している。

木は主に檜の類で、冬はことごとく落葉し、春は滴るばかりの新緑萌え出ずるその変化が秩父嶺以東十数里の野一斉に行われて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に、様々な光景を呈するその妙は一寸西国地方た東北の者には解し兼ねる。元来日本人はそれまで檜の類の落葉林の美を余り知らなかったようだともいう。



武蔵野

映画文学人生論

そういえば、芭蕉や蕪村には檜を詠んだ句はないと思う。檜の美は独歩の発見かもしれない。

独歩が「今」というのは、「詩人となりてわれは餓えん」（『欺かざるの記』）という覚悟で、明治二十九年九月から三十年四月まで東京郊外渋谷村に住んだときである。平成十一年の「今」からふり返ると、百年以上前の古い昔だ。「今」の武蔵野の特色は萱原でも林でもない。渋谷は東京の郊外どころか、最先端のファッションをもとめて若者たちが集まってくる大繁華街だ。

山は暮れ野は黄昏の薄かな

という蕪村の句のような風情はない。

『武蔵野』は映画が見当たらないので、大岡昇平原作、溝口健二監督の『武蔵野夫人』を観た。

昭和二十五年に発表された原作は、終戦後の武蔵野を背景としている。復員兵の宮地勉（片山明彦）が幼時から見慣れた木立は檜、杉、樺、檜などが最もなつかしい映像だった。

それからでも既に六十年は過ぎていく。「今」の武蔵野にそんな木立が残っているかどうかかわからないが、私が住んでいる青べか村の団地には、檜、樺、樺、檜の木は立っている。わずかに武蔵野の俳を伝えていると思うことにしよう。

武蔵野の俳もあり冬木立